

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

瘦せたる人を嗤喚へる歌二首(巻第十六 三八五三・三八五四番歌)

石磨いはまろにわれ物申ものまをす夏瘦やせに良よしと

いふ物むなぎそ鰻むなぎ取り食めせ(めせの反なり)

瘦やすも瘦やすも生いけらばあらむを

はたやはた鰻むなぎを取ると川に流るな

久しぶりに都心に研修に出た。東京神田のオフィス街は夏の日差しに揺れていた。横断歩道を渡りながら目を留めたのは、ビルの一角に古い旅館のような佇まいの一軒家があったからだ。老舗の「うなぎ屋」。言うまでもなく幟のぼりが立っていた。「う」の字が、鰻の絵になっているあれだ。洪い暖簾と年季の入った看板のほか、メニューはない。ショーケースや蟻あみでできた料理の見本もない。張り紙で品書きがただ一つ、「うなぎ重一、八〇〇円」。横断歩道を渡る間に、私の頭はフル回転だった。お昼にしては豪華すぎるが、土用も近いし、旬の物はやはり口にしてみたい。それにしても、知らぬ土地で一人のお昼ご飯は勇気がいる。この店には松竹梅も並も特上もない。この一、八〇〇円は果たして高いのか安いのか。迷うところだ。それから・・・「いらつしゃい。」結局、カウンターに座った。

万葉のこの時代、偉大な歌人大伴家持が「瘦せてる人を嗤う歌」というのも驚くが、この二首の後に長い説明がついているのも不思議だ。通称石磨という吉田連老という人がいて、儒教的徳目のあるこの人は、たくさん食べて飲んでいながらもかわらず体がひどく瘦せていたので、家持がちよっとこの歌を作って戯れに笑ってみたのである。万葉集に戯れの歌が説明付きで載っている。万葉の「笑い」とは、どんなものだろう。「石磨に申し上げたい。夏やせに良いという物、鰻をとって召し上げられ。そうそう、瘦せてはい



ても生きていけばよいものを、かえって鰻をとろうとして川に流されてはなりませんぞ。」現代なら、(笑)という記号がつくのだろうか。メールでは、記号を駆使して「笑った顔」なんていうのを付けたりもする。この歌の前後には、「鯨魚をとる海は死ぬのだろうか」とか、「尿葛うりくわの蔓つたのように絶えず宮に仕えます」という歌がある。鯨に鰻に尿葛。なんとも言い難いが、万葉集には笑いもある。涙もある。そして、あの時代から夏瘦せがある。この国では、それに打ち勝つためには鰻が良いと千何百年も語り継がれ、食べ継がれてきた。奇跡のような話である。この先千年、やはり鰻は食べ続けられるのだろう。

写真の碑は、愛知県岡崎市桜井寺町の蕎麦屋「千里千里本店」の庭園にある。先々代は鰻屋で、鰻の供養のためにこの碑を建てられたそう。仕込みの時間にもかかわらず、お孫さんは笑顔で迎えてくださった。すぐ裏には岡崎ゲンジボタルで知られた男川が流れている。

カウンターの前は厨房だった。鰻を焼くご主人の背中から声が出た。「あと、いくつだ。」手慣れた動きと飲み干す麦茶。壺に入った秘伝のたれ。想像とは違ってさらっとしている。この道何十年と同じ事を繰り返して、同じ味を保っていく。お代を払うときの馴染み客の笑顔が、この店のよさを語っていた。何より一品勝負の心意気に打たれた。「ごちそうさまでした。」味は満足、体も元気。明日からの粗食のことはもう少し忘れていよう。